「小説 独鈷山」を読んで

櫻田喜貢穂（7 組）

昨年 10 月下旬、コロナの脅威がだいぶ薄らいだので、故郷の会（東京青木会）では恒例の「故郷を巡る旅」を実施することになり、10 人の高齢者が東京から青木村に向かいました。上田駅からは青木村役場のマイクロバスに乗せてもらい、青木村に入る前に、塩田平をまわり、無言館を訪れ、次いで東前山の前山寺の参道をゆっくり登って、大粒の銀杏が降る中、三重塔と独鈷山を仰ぎ見ました。

同じころ、黒坂正文さん（66 期）が「小説 独鈷山」を上梓していたのです。その小説の主要な登場人物の一人が「桜田さん」とのことで、昨年 12 月初め、丸山暢久君（4 組）から、年明けの 1 月 3 日には上原昇君（2 組）から、「お前の家と何か関係があるのでは？」とメールをもらい、「小説 独鈷山」を知ることになったわけです。

前山に親戚はいないから、小説に登場する「桜田さん」の存在も名前も黒坂さんの創作に他ならないのですが、黒坂さん（演奏家としては黒坂黒太郎さん）のコカリナの演奏は何回も聴いていますし、そのスピーチからお人柄も想像できたので、「小説 独鈷山」を取り寄せました。

昭和 34 年、西塩田小学校 4 年の古坂一平くんの 1 年間の体験（遊びや行事や農作業の手伝い）とそれを通じて感じた喜びや悲しみや悔しさや理不尽に対する憤りが転校生の剛くんとの友情を軸にして描かれています。剛くんの伯父さんが「桜田さん」というわけです。

私が育った青木村は塩田平の北西の隣村で、黒坂さんとは世代もほぼ同じですから、小説に出てくる情景がとてもよくわかります。あったかくて、やさしくて、文体も平易で筆者の人柄がにじみ出ているようです。

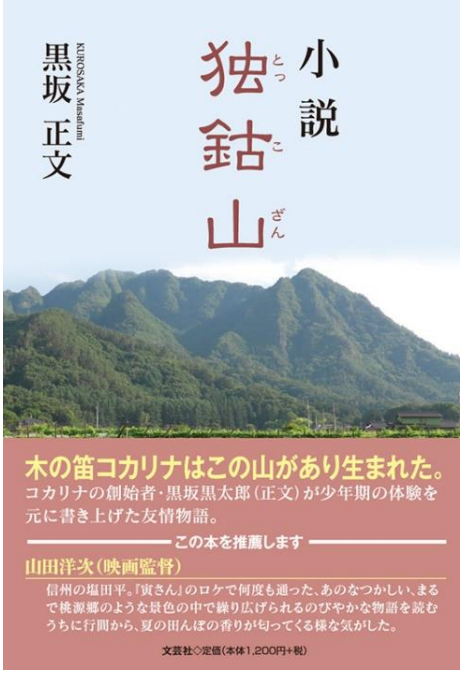
「役水」と「雨乞い」という水がらみの章は強く印象に残ります。近接していても山一つ隔てるだけで水（農業用水）の事情はだいぶ異なるのですね。

青木村も谷川からの水を農業用水に使うのですが、塩田より雨が多く、谷が深いせいか水量は豊富なようです。私の実家は村の中心地にあるのですが、敷地の真ん中を農業用水路が通っていて、そこは夏には格好の遊び場でした。

上原君に返信のメールを書いている時に突然思い出しましたが、私の親父は昭和 34

年に統合された塩田中学に転勤になり、それから長いこと塩田中学に勤務していたので、黒坂さんは私の親父を知っているかもしれません。親父はそのころからナルコレプシーを患い、授業中にも眠り込んだそうで、「居眠り教師郎」というあだ名をつけられたと聞いています。そういう特異な「桜田先生」から「桜田さん」を創作したのであれば面白いですが、機会があったら黒坂さんに「桜田」を創作した理由をうかがってみたいものです。

（編者注：「小説 独鈷山」の紹介は 65 期 HP、24 年 1 月 7 日付をご覧ください）



黒坂正文著「小説 独鈷山」

（2024 年 1 月 12 日記）